

Title	<市民公開講座 >いい仕舞いをめざして 四万 十川のほとりの在宅医療の物語
Author(s)	小笠原, 希
Citation	弘前医学. 67, 2017, p.182-183
Issue Date	2017-02-27
URL	http://hdl.handle.net/10129/6019
Rights	
Text version	publ isher



<http://repository.ul.hirosaki-u.ac.jp/dspace/>

市民公開講座 I

「いい仕舞いをめざして 一四万十川のほとりの在宅医療の物語」

四万十市 医療法人 関の会 大野内科
院長 小笠原 望

(1)はじめに

高知県の西南部を蛇行して流れる四万十川。その川のほとりに演者の診療所がある。この地域には「いい仕舞い」という言葉がある。「住み慣れた家で、痛まず苦まず、その日まで食べて、話もできた最期」をいい仕舞いと言う。

演者は四万十の地で、在宅医療をおこない在宅での看取りを続けている。在宅死は、病院の白い壁と白衣に囲まれた死とは違う自然な流れであるところがいい。そして、とにかく本人はもちろん取り巻くみんなに覚悟のあるのがいい。

患者さん自身も家族も自然な表情であり、病気の前に生活がある。生活のなかに介護があり、いつも患者さんが中心にいる。患者さんと家族との会話に遠慮がない。ここがいい。

(2)言葉の力

在宅の超高齢者の言葉にはユーモアがある。そして、力強い。四万十の自然の中で、自分の死期をきちんと認めながらの日々は、人間そのものの持つ巧まざるユーモアを感じる時がある。演者は医療の現場の言葉に興味をずっと持ってきた。

言葉は在宅医療の大きな武器である。患者さんのところを受け取るひと言、患者さんへところを伝えるひと言を演者は鍛えてきた。自分の死期を感じながらのユーモアのある言葉に、「人間はすごい、ここまでなれる」と、感動することも珍しいことではない。できるだけ素直に、自然な言葉を大切にしたいと思うようになった。

看取りの場面が近くなっても、家での言葉は湿っぽくはならない。なじみの関係で、信頼の中での言葉のやりとりがその日まで続く。医療の現場ではもちろん患者さんへの正確な技術も必要だが、ところを伝える言葉を大切にしたい。言葉の力を信じたい。私たち医療者も普通の感性と普通の言葉をもっと持ちたい。いのちの最期には、とくにそれを思う。自然のなかでいると、ひととひととがもっと自然な言葉で接することができたらいいと思うのだ。医療者は「いのち」に格闘するばかりではなく、もっと自然の流れを感じたらいいと思う。死を意識する場面でも、言葉で思い切りいのちを抱く気持ちが必要だといつも思ってきた。「死ぬまで生きる」、それに寄り添う気持ちも大切ではないか。

(3)「神も仏もみんな集まれ在宅死」

在宅死は最高のぜいたくだと思う。四万十の自然はどんな病院の緩和ケアより大きな癒しになる。ベッドから見る川の景色、鳥の声、自然を感じながらの毎日はそれ自体が癒しなのだ。四万十川の四季の中で、「ひとのいのちも自然のなかのもの」と演者は思ってきた。ここ2か月に在宅で看取った5人は、補液を必要としないほど最後まで食事もできた。痛みもなかった。以下に印象に残る例を紹介する。

「母がおかしいんです。ぐったりしています。救急車を呼んでそちらへ行っていいですか」、筋萎縮性側索硬化症の患者さんの娘からだった。患者さんは六十五歳。快活な話しぶりが印象的だった。病状が進行してきても、家族にも深刻さを見せなかつたらしい。予想しない急な変化は、きっと辛抱しながらの毎日だったのだろう。救急車が到着するまでに、ぼくはいろいろな場面を考えていた。

救急車の音がした。ぼくは駐車場で救急車を迎えた。車に乗り込んで診察した患者さんは、下顎呼吸で今にも呼吸が止まりそうだった。横に座る娘に聞いた。「人工呼吸器はどうする?」。娘は胸の前でバツェンと両手を交差させた。「気管切開はしない。人工呼吸器はつけない」、患者さんは病名の告知の時から一貫していた。アンビューバッグで何分間か人工呼吸をしたら、患者さんの意識が戻った。「しんどうないかねえ」「しんどうない」「機械はやっぱりつけんかねえ」「いや」とはっきりした受け答えだった。

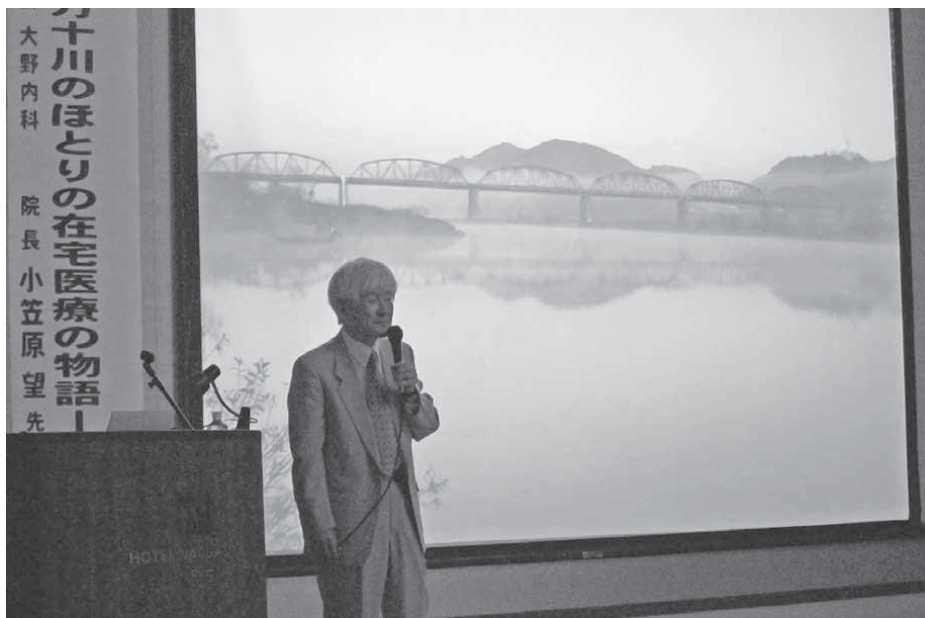
家族と話した。「どうしましょう、総合病院へ行きますか」「このままでお願いしたいけれど、夜になったらどうしますか」。大野内科は無床診療所。点滴室での見守りが続いていた。「ぼくはとことん付き合います」と、答えた。

患者さんを三人診たらその人のところへ行くのを、一日中繰り返した。診察室での他の患者さんたちの診療が終わるのを待っていてくれたのだろう。夕方に家族の中で、その患者さんは最期を迎えた。「自分の意思を通した立派な最期ですね」と、ぼくは家族みんなに言った。「立派な最期だって、お母さん」と娘が大きな声で反芻した。

診療所の玄関で患者さんを見送った時には、午後8時を回っていた。いのちを看取る、長い一日が終わった。
(スタイルアサヒ 2015年12月号より抜粋)

(4)おわりに

「いい仕舞いをめざす」演者の在宅医療の実際を、106枚の四万十の風景写真(大野内科 森千里事務長撮影)とともに物語として語った。在宅死に至る医療は「科学ではなく文学」ではないかとも思う。患者さんから求められている医療には、大きな幅がある。どんな場面でも、優しい言葉のやりとりを大切にしたい。演者はこれからも、「いい仕舞い」のプロデューサーを続けてゆく。



小笠原望氏の講演の様子